関係の隣

白河　たこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

関係の隣

【Ｎコード】

Ｎ２９２４Ｊ

【作者名】

白河　たこ

【あらすじ】

俺はあなたが好き。あなたは誰が好き？

全ての好意の矢印が絶対に向き合わないすれ違いだらけの恋愛物語。

あなたは誰と向き合いたい？

＊1

□

春風。

桜は空を埋める。

太陽は笑っていて。

月は泣いていて、お前は黒。

□

「お兄ちゃん、起きて」

……、何かが俺の上で大いに暴れてくれている。誰だ、俺をトランポリンか何かと誤解してぴょんぴょこと跳ねているのは。俺は誰もが夢見る一人暮らしの真っ最中だぞ。この家には俺しか住んでいない。俺の睡眠を邪魔するものなど誰もいないはずなのに……。

ああ、だんだん怖くなってきた。

俺は不快な目覚めと共に、俺の上で暴れている動物？　のなにかを握った。

「ひゃう！」

………なんだ、今の可愛らしい泣き声は。

「もー、早く起きないと、学校遅刻するよー」

俺は「学校」と「遅刻」というワードに反応して重い瞼を、こじ開ける。すると周りの光を徐々に吸収する。

「っ！！　な、なんでお前ここにいんだよ」

たまげた。俺の上で暴れていたのは、まさしく俺の妹だった。

そう、妹だったんだ。

「え、昨日から居るじゃん！」

「しらねぇよ」

ほっぺを膨らましながら、俺の上で怒ってやがる。

「知らないって。昨日の夜に来たじゃん。お兄ちゃん、私のこと家

に入れてくれたじゃん」
「そうだったかな……。まぁいいや。さておきだ。なんで来たんだよ」
とにかく妹を俺の上からどける。
「それも覚えてないの！　……お婆ちゃんとお爺ちゃん、死んだの」
一瞬、頭が真っ白になった。そもそも、俺が小さい頃に両親は死んでいて、俺も妹も親戚の人に育ててもらっていた。それで俺が高校に入学することになって、親戚の家を離れて一人暮らしをすることになった。それから、一年が経った。丁度一年前は無邪気な笑顔を見せてくれたあの人達が、亡くなった。
「……、で俺のところに？」
「うん、あっちで一人暮らしなんてできないし、私も、お兄ちゃんと同じ高校に合格したから」
「そうか、合格したのか。よかったな、ずっと夢だったんだろ？」
「うん」
早朝からこれほどまでに疲れたことはなかった。なんでこうなる……。
「ところでだ。今何時だ？」
ふと、感覚的にこの言葉が出たことを、軽く感謝した。
「……あ。遅刻する！」
俺と妹は、家を出た。家は五階建てのマンションの片隅に位置している。いつもマンションの玄関に溜まった落ち葉やらゴミやらを、俺の家の隣で生活している美人奥さんがほうきで綺麗にしているのが日常なのだが、今日はなぜか居なかった。ピンクがかったロングヘアーで、ほっそりとしたボディーラインが美しいその奥さんと毎朝挨拶するのも日常だが、今日はできない。ちょっと調子が狂う。

＊2

学校に到着したのは、遅刻する寸前だった。それから入学式を終えて、妹と別れを告げ、中学時代からの友人である芥川総馬（あくたがわそうま）と教室に向かった。

「妹さん、この学校に入学したんだよな？」

「あ、よく知ってるな」

「まぁな。……ところで名前なんていったっけ？」

「沙希（さき）だよ、沙希」

納得したように頷いていた。

教室へ向かう途中、俺らはあきれていた。なにも変わらない景色。廊下では女子が大声で騒ぎ、カップルが愛をはぐくみ、廊下に座って雑談している。本当になにも変わっていない。2年生になってもなんら成長なんてしていない。

芥川がシニカルに笑っていた。

「それに関しては、僕たちだって変わらないさ」

「かもな」

肩をすくめて、笑っておいた。

教室に入る、2年5組。

結局はここも騒がしかった。どちらかというと、俺らの通うこの『公立帆志（ほし）商業高校』は、女子生徒の在学率が高く、教室の半分以上を女子が占めている。それにより、女子生徒目当てで入学してくる男子も居るが、特に俺はそういった目的で入学したわけではない。将来の夢があって入学したのだ。

ただ、俺の横で笑ってる哲学野郎、いやすまん、芥川はそれが目的らしい。だけど、女子に対して哲学やら理論やらそういう難しい話してたら、いつまで経っても彼女なんてできないぜ？　と言ってみるも、彼女なんていらない！　婚約相手を！　俺に嫁を！　とかわけのわからないことを言ってくる。どういう思考回路してんだよ。

ところでだ、この丸眼鏡かけた哲学野郎と俺、あともう一人男子がこの教室にいる。結局は授業が始まってもこの3人。つまり、この2年5組の男子全員で3人というわけで、肩身狭い存在になっちまったよ、男子は……。

「隆、担任来たぞ」

隆。死んだ親が俺につけた名前。いや、唯一つけられた名前。妹の沙希はついこないだ亡くなったらしい親戚が名づけた。結局は俺だけなんだ、本当の親から名づけられたのは。でも、沙希もそう思っている。嘘をついた。悲しませないように。

でも、今ではそれがつらい。もし、今知ったらあいつはどんな顔をするだろう。後先考えずに嘘をついた。そんな嘘は醜くなるだけなのに、子どもだった俺はなにも妹のこと考えてやれなかった。

沙希が産まれて、名前をつける前に親は亡くなった。

かわいそうとか、そういう言葉は使いたくないけど、まさしくそうだった。

そんな昔の思い出に浸っているところに担任はきた。俺は即座に自分の机に腰をかける。

「おはようございます」

澄んだ声だけれどもどこか重みのある、重圧感を覚える声。スマートだけども魅力のあるボディーライン。あの隣の美人奥さんとは違う、エロさのある体形。服の上からでも確認できるくびれ。きっと本当に細いのだと思う。黒いショートヘアーに黒ぶち眼鏡。赤い口紅をつけた唇。そしてオーラ。ドス黒いオーラ。

隣に座っていた芥川が口をあける。

「おいおい、あれってもしかして森中じゃないのか？」

聞き覚えがあった。たしか、暴れた生徒を力で収めたとかなんとか。とにかく反抗したら殺される。そんな噂が出回っていた。

「やべぇ、僕たちも殺される」

半笑いの芥川。ちょっとキモい。

「森中です。一年間よろしく」

えらく簡単な挨拶だな。と、ツッコミをかましている場合ではない。待て待て、地獄じゃないか、森中が担任なんて。

教室をざわめきが支配する。

「やっぱり森中じゃないか、初めて見た」

芥川は珍しいものを見るような目で、森中を見ていた。ただ、俺はなにか見覚えがあった。たしか、1年生が終わる頃に、屋上で。

＊3

確か、１年生の――そう、３年生が卒業した3月の中旬ごろにお気に入りの屋上に出向いたら、たまたま森中が居たんだ。３月の生ぬるい風を気持ち良さそうに浴びていた。そして、その先に臨める灰色でなんの温かみもないビル群をまじまじと見つめていた。
「……ここ、好きなんですか？」
そうやって俺が聞くと、ここは居心地が悪い。とか想定外の答えが返ってきて度肝抜かれたからよく覚えている。
「なら、なんでいるんですか？」
しばらく考えて「さぁね」とか言われた。で、「ならなんであなたはここに？」って聞かれたから、
「俺はここ、好きなんです。ここから見える景色、落ち着くんですよ」
「そう、私とは正反対の意見を持っているのね。でも、落ち着く？」
首を傾げて聞いてきた。
「はい。一日中変化していくこの景色、見ているとおもしろいですよ」
すると、あっけない返事をして、立ち去って行った。握っていたフェンスにちょっとした温もりを残して。
それから、何度か会った。何度といっても片手で数えられる程度だけど。
――たしか、そんな出会いだった、森中とは。

昼休み、お気に入りの屋上で思い出していたことを感じたくて向かう。途中から螺旋階段が続いて、切られた鎖と錆びた南京錠がだらしなく地面に這っている。そして錆びくさいドアを開けると屋上に辿り着く。
――辿り着く。

「お、おい、なんじゃありゃ……」
俺が屋上に上がって、真っ先に見たもの。
一人の少女が、フェンスの向こうにいる。そして、俺に背中を向けている。つまり、自殺を図ろうとしていた。
「ちょ、ちょっと待て、待て待て、なにしてる？」
俺は少し少女に近づく。
「なにって、自殺しようとしているのよ」
いや、そんなもん見たらわかる。そんな猿じゃねぇ。いやいや、そんな突っ込んでいる場合じゃねぇ。
「なんで？」
「つまらないのよ、世の中が」
こっちを向かず、ビル群を見たまま、冷たい声が、胸に刺さる。
「だから自殺を？」
「そうよ」
すごく淡々と話されていて、なんだかあっけない。
「も、もうちょっと生きてみたらどうだ？　意外と楽しい世の中かも」
「……それもそうね」
いや、あっけない。あっけなさ過ぎるぞ。ここはもうちょっと白熱したやりとりのあと、俺が無理やり自殺を止める、的なのが理想だろ。
とか、そんな俺の理想を並べる必要もなく、少女は既に俺の目の前に立っていた。
「あなた、名前は？」
ふと、突然吹いた春風が茶色い俺の髪の毛をそっと撫でた。そして、改めて顔を見る。
初めて見る顔だった。真っ白な色をしていて、まるでイブに見るシリウスのような、そんな輝きがあるが、なにかおとなしい顔つき。全身が棒のように細く、握ったらすぐにでも折れてしまいそうだった。そんな体を真っ黒のワンピースが包んでいて、骨盤あたりまで

延びた黒髪が、春風になびいて、美しかった。真っ白の肌と、それを包む真っ黒の全て。真っ白な裸足は汚れていない。

「中村、中村（なかむら）　隆（りゅう）。あんたは？」

「黒条（こくじょう）　林檎（りんご）」

俺は、右手を差し伸べたが、少女は俺の横をすっと通って屋上をあとにしてしまった。

＊4

少女が去ってからずっと俺は、この屋上に居た。
始業式の日は基本午前で終わり、あとは下校となる。昼休みのあと掃除をして下校。そんな流れだ。
で、まぁ掃除などする気もないので屋上で寝転がって真上を見ていると、春のぬるい風が雲をそっと流していた。太陽は時たまその流される雲に、隠れまた現れを繰り返し輝きを保っていた。
そんな午後のひととき。
ふとそんな景色から全てを外すと、下の方から女子生徒の声が聞こえてくる。いつもワイワイと楽しそうな声を響かせている女子生徒が、今回はちょっと違う雰囲気を漂わせていた。
あきらかに、楽しそうに雰囲気ではない。
――ようは、「死ぬな」と言っていたのだ。
嫌な汗が、俺の額を流れる。
「……あの馬鹿っ」
俺はさっと頭を切り替え、床を蹴り、階段を駆け下りていく。スピードを上げるにつれ、横を流れる景色は、どんどん早くなっていく。早くなってやがて一本の筋が完成する。しかし、その筋とは裏腹にその時俺は、特にこれといってなにも考えてはいなかった。
「黒条！」
教室のドアを勢いよく開ける。そして俺は、視線を教室の奥へとやった。そして目に入った光景に唖然とする。
彼女はまた身を乗り出していたのだ。いや、正確には窓枠の上に乗っていたのだ。その空気のような体を――。
「またあなた……」
彼女の冷たい視線は、外の世界。
「お前、おもしろいかもしれない世の中を、見たかったんじゃなかったのかよ！」

「……もういいわ、どいつもこいつも馬鹿ばかりだし、いくら時代が進んでも、何一つ変わらないんだもの」
　きっと今、彼女は悲しい顔をしているに違いない。
「なら、お前は変わっているのか？　変わろうとしているのか？　お前が変わらないなら世の中も変わらない。お前が変わったら、世の中が変わったように見えるはずだ！　お前が変わろうとしていないのに、世の中が変わらないなんて戯言吐いて、ただの身勝手な野郎じゃねぇか！」
　とっさに奇麗事を言ったことなんて、分かっていた。自分だって何一つ変わらない世の中にあきれていて、自分が変わらないといけないことだって分かっていて、それでも変われていない自分がいることだった分かっていた。けど、綺麗事言わないと、どうにもならないだろ、この状況。
　すると、そっと上を向いた彼女は、途切れそうな声でささやいた。
「いいの……、もう決めたから」
　俺は、もうなにも言えなかった。
　言えなかったからこそ、刹那自分を責めた。
　――――彼女が、身を外へ投げたから。
　春のぬるい空気を疾風の如く切り裂き、１階まで転落していく。
　その姿を想像した。
　俺は、また走っていた。その、１階まで。その、彼女が落ちる所まで。

＊5

次に彼女を見たとき、彼女はその黒いワンピースをずぶ濡れにしていた。彼女の純白の肌には真珠のような水玉が次々と流れていた。
つまり、彼女はプールに落ちたのだ。
3階から。
ここの学校は授業用プールと飛込プールの2つがあり、どうやら飛込プールに落ちたらしい。

「お前さ、馬鹿じゃねぇのか？」
保健室で寝ていた彼女は口を開けようとはしなかった。
「そもそも、なんでそんなに死にたがるんだよ。別に変わらない世界で変わらずに生きていたら、いいじゃないか」
すると彼女は、少しの間を置いて「嫌」とだけ言ったのだった。
その後彼女は、平常授業の日の下校時間、7時まで眠っていた。
誰かの寝顔を見たのは、久々だった。でも、その寝顔を見て、俺は驚いた。棺の中の両親に似ていたから。そして、あまりにも綺麗だったから。まるで、毒林檎で眠らされた、針で眠らされたお姫様のような寝顔。細い吐息が心地よく聞こえてきて、そして、いつの間にか俺も寝ていた。
ちょうど彼女の寝ているベッドに寄り添った状態で。

目が覚めると、外は真っ暗になっていて、低空に潜む欠けた月が顔を覗かせていた。そして目の前には、すでに身支度を済ませたであろう黒条が呆然と佇んでいた。俺はとっさに寝ていたベッドから重い頭を上げる。そこでふと、思い出す。
「……なぁ、お前屋上で去り際に2年3組って言ったよな？」
俺がなぜ一発で彼女の自殺しようとしていた教室を見つけ出せたのか。きっと彼女は全て分かっていて、さらには気付いてほしかっ

たのだと思う。

――――私はここにいる。

――――私は2年3組にいる、と。

するとと彼女は首を傾げて言った。

「一応病院に行くから……来て」

だ、そうだ。全く話が噛み合っていないことは、気にしないでおく。そして、俺には拒否権などないことを知る。彼女、俺のかばんを待っていたから――。

＊6

すでに俺らが校門をくぐった頃には夜は増していて、街を照らすネオンや、夜を知らせるサイレンが纏わりついていた。その闇に溶け込むかのように、彼女のボディーラインを軽くタッチした黒いワンピースがひらりと揺れて、俺の何歩も先を進んでいた。しかし、見失うことはなかった。それでも闇に溶け込めない露出した白い肌が、くっきりと見えていたから。

そして、その背中を追いかけて行くうちに、俺はその小さくて黒くて白くて、そして優美な彼女の背中を気に入っていた。

勝手にお気に入り登録、完了。

しかし、本当に彼女は何歩も先を進んでいく。あんな華奢に見える細い体なのに、どれほどの力を持っているのか、不思議でたまらない。

………いや、3階から飛込プールに落ちて平然としていたくらいだから、その時点でこれほどの力を持っていることくらい、軽く想像できた。と、そんなことを思考しているうちにいつの間にか、目的の病院の玄関の前にいた。

「(た、お助けを………………)」

とてつもなくおもっ苦しい、そしてなんというか重圧感を覚えるなにかが俺を押し潰そうとしていた。

――――なんなんだ、この沈黙は……。

病院について既に30分、俺と黒条の間に、言葉が発生したことがない。いや、まぁどちらかと言えば発生はしているものの、成り立ったことがないという表現が一番この場合的確なのだと思う。一応、一般的な初対面としての質問は一通り試してみた。「食べ物なにが好き?」とか、「部活、なにしてる?」とか、「元中どこ?」とか――。ただ、この横にいるやつが、総無視をしてきやがる。ま

ぁそりゃ、病院なんだから静かにしていないといけないことくらい、高校3年生にでもなれば、分かっている。ただ、総無視はさすがに斬新すぎじゃねぇかなぁ。

――あぁ、ほんと助けて。

つい、語尾に（涙）とか言いたくなる。

それから沈黙がほんの少し支配したあと、病院を後にした。

そしてまた、あのお気に入りの背中が、俺の前を行く。これから先の人生に彼女がいるのかは、不明ではあるが、今、この瞬間が意外と楽しく思えた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2924j/

関係の隣

2010年10月11日23時01分発行